

イスラームの諸伝承の中のイエス ——イブン・ハンバル『禁欲の書』を中心に——

加藤 瑞 絵

Jesus in Islamic traditions
——focusing on Ibn Ḥanbal's *Kitāb al-Zuhd*——

Mizue KATO

Abstract

In this article, I give abridged translations of the later part of Chapter 12 “Jesus’s abstinence and admonition” from Ibn Ḥanbal’s *Kitāb al-Zuhd* and I analyze traditions and structure of this chapter as a whole. Negative remarks about worldly affairs are repeated there stressing that one should abandon worldly wealth, knowledge and so on. Love for God, constant remembrance (dhikr) of Him and love of their neighbors are remarkable motifs of this chapter. These motifs should be analyzed more not only in comparison with Christianity and Sufism, but also in wider context of Islamic cultures.

要 旨

本稿では、中世イスラームの法学者、伝承家イブン・ハンバルの『禁欲の書』から、第12章「イエスの禁欲と説教」後半を取り上げて抄訳を示し、その内容および章の構造を分析する。同章では特に、現世への否定的言説を繰り返し、強調していることが分かる。第12章全体を見ると、神を愛し想起すべきことや隣人愛といった内容が特徴的である。これらはキリスト教やスーフイズムと比較してのみならず、より広いイスラーム文化の文脈においても、さらに考察すべきである。

I. はじめに：本稿の目的

イスラーム世界では8世紀後半頃から「禁欲家 (Zāhid)」と呼ばれる人々

が登場し、来世での火獄の罰を恐れ悲しみ、現世を放棄し、節制に努め、慎ましやかに生きたという。この禁欲家たちの実践と精神性、すなわちイスラームにおける「禁欲主義 (Zuhd)」が未だ十分に研究されていないことは、年報第 28 巻にて指摘した通りである。スーフイズム（いわゆるイスラーム神秘主義）に先んじて始まった運動としてその存在は認知されているが、『禁欲の書 (*Kitāb al-Zuhd*)』と呼ばれる複数の同名伝承集の分析は進んでいない。先行研究が示す「禁欲」は後代のスーフィーたちの言説に基づいているし、禁欲主義とスーフイズムという 2 つの運動の関係性にも未だ不明瞭な点が残る [加藤 2020: 79-81]。スーフイズム独特の修行理論が構築されるよりも時代的に先行し、代表的な『禁欲の書』の 1 つであるイブン・ハンバル (*Aḥmad ibn Ḥanbal* 780-855) の同書を分析することは、こうした課題を解決するために不可欠な作業であると考えられる。イブン・ハンバルの『禁欲の書』の特徴としては、ムハンマド以前の預言者に関する伝承を多く含む点が指摘されており、その中でもイエスに関する伝承が最も多い [加藤 2020: 82]。第 28 巻に続き本誌の紙面をお借りして、今回は筆者の力不足と紙幅の都合で割愛した第 12 章「イエスの禁欲と説教」後半を分析し、考察したい。

Ⅱ. 先行研究の整理：イスラームの諸言説におけるイエス像

[Barker & Gregg 2010: 83-85] では、イスラームの初期に形成されたイエス像を 3 つの視点から整理する。以下、同研究の整理に基づき、ムスリムのイエス像を大まかに確認しよう。

第 1 の視点は、神に選ばれた人間、預言者としてのイエスである。これが全ムスリムにとって基本となるイエス像である。彼はあくまで人間であり、神の子でも神性を持つ者でもない。神は「産みもせず、生まれもせず、彼に比べうる何のものもない」(112:3-4)¹。神には子や並び立つ者は存在しない、というのがクルアーンに基づく基本的理解である。

第 2 の視点は、終末の象徴としてのイエスである。このイエス像はハ

1 クルアーンの翻訳は主として『日亜対訳・注解聖クルアーン』（日本ムスリム協会、1982年改訂版）に基づき、適宜訳を変更した。また、聖書の翻訳については、『聖書：旧約聖書統編つき：新共同訳』（日本聖書協会、2006年）に依拠した。

ディース²に現われ、彼の最期がいかなるものであったかという点に主に関わるといふ。イスラームの教えでは、イエスは十字架上で処刑されていない。イエスは終末を待って再臨し、終末の前兆として出現する偽キリスト（ダッジャールと呼ばれる）と戦い勝利する。そしてムハンマドの優位性を示し、死すとされている。

第3の視点は、禁欲的人物としてのイエスである。イエスの言説はクルアーンにおいては詳細に語られず、スーフイズム³という運動においてこそ、それらが具体的に示される。神との合一を求める方向性の中で、イエスは精神的な師として崇拜されるようになる。さらに、この禁欲的人物としてのイエスに関連する諸言説の傾向は [Khalidi 2001] に基づき4つに分類される [Barker & Gregg 2010: 99]。第1に、終末論的な内容を含む言葉。第2に、福音書的な内容の言葉で、それらの多くは「山上の説教」に由来するという。第3に、禁欲的言葉や物語。完全で断固たるイエスの節制を伝えるものである。第4に、ムスリム間の対立に応答する言葉。例えば、社会における学者の役割や国家に対する態度、自由意志と予定説、信仰と罪といった事柄に関する内容である。本稿で取り上げる諸伝承に現われるイエスは、主にこの第3の視点に関わるであろう。

Ⅲ. イブン・ハンバルの『禁欲の書』

1. テキストと訳文の表記等について

本稿における翻訳は、[Ibn Hanbal 1984] を底本とし、併せて [Ibn Hanbal 1999] を参照した。両者の構成は大きく異なり、前者が1つの章

2 「ハディース」は「伝承」を意味するアラビア語。その伝承を記憶し伝えた人物たちの名を連ねた「伝承経路」と「本文」から構成される。狭義のハディースは、預言者ムハンマドにさかのぼり、イスラーム法の諸規則を導出する源泉となる伝承を指す。本稿ではそのような狭義のハディースだけではなく、ムハンマド以外の人物の言行を伝える様々な「言い伝え話」を含め、伝承経路と本文という形式をとるものを「伝承」と呼んでおく。

3 ここでは、「スーフイズム」とは厳密な信条に基づく特別な運動というのではなく、禁欲主義や詩的な感情の迸り、哲学的思索、神秘体験などを含む多様なアプローチによって神との合一を探究する方向性であると規定している [Barker & Gregg 2010: 85]。後代の人間が異なる思想潮流として捉えるものを、区別せずに大きな枠組みの中に位置づけるという理解の仕方には、筆者も大いに賛同するところがある。ただ、それを「スーフイズム」の名で代表し呼ぶことが適切であるかという点は、慎重に検討すべき問題であると考える。

としてまとめる「イエスの禁欲と説教」は、後者では「イエスの知恵」と「イエスの禁欲補遺」に分かれている。また、採録する伝承にも異同がある。ここではそうした相違の検証には立ち入らずに今後の課題とし、本文の検討のためにのみ後者も用いることとする。なお、抄訳が2014年に出版されたが、参照できなかった⁴。

以下、『禁欲の書』からの抄訳の通し番号と見出しは、前半の抄訳同様、見易さのために筆者が付した、[Khalidi 2001]に掲載されている伝承については、これも前半の抄訳の際と同様に、見出しの後に[MJ*]（*にハーディー訳での通し番号）で示した。また、抄訳中の[]は筆者による補いや言い換えである。51番目から最後の103番目までを掲載する。伝承経路、神やイエスら預言者の名に添えられた様々な賛辞は、煩雑さを避けるために省略した。伝承本文の内容を把握し、考察することに主眼を置くためである。

2. 第12章「イエスの禁欲と説教」（後半）抄訳

(51) イエスの奇跡 [MJ59]

イエスが彼の兄弟を訪ねようと出立すると、1人の男と出会い、彼の兄弟が既に亡くなったと告げられた。そのためイエスは「訪問を中止して」戻ったが、兄弟の娘たちが彼のもとを訪れる。イエスは娘たちに「行って、私に彼の墓を見せなさい」と言い、彼女たちは行ってイエスに墓を見せた。イエスが大声で呼び掛けると、死んだ男が白髪姿で出てきた。イエスが「あなたは何某ではないですか」と尋ねると、彼は「そうです」と答えた。イエスが「私があなたに[起きたのを]見た[出来事]は何ですか」と尋ねると、彼は「私はあなたの声を聞き、それがあの叫び声 (al-ṣayḥah)⁵であると分かりました」と答えた。

4 *The Summary Translation of Kitabuz Zuhd by Imam Ahmed Ibn H'anbal*, trans. By Ibrahim Abdullah Rahim, Feed A Read.com.

5 クルアーンには、「叫び声が、不義の者を襲った。彼らは翌朝その家の中で伏していた。」(11.67)とある。ジャラーラインのクルアーン注釈によれば、「地震を伴った叫び声」が不義の者を捉え、「彼らの心臓は止まった」という[マハッリー&スューティー 2002-6 (2):120]。なお、同章句に語られた「不義の者」とは、預言者サーリフが遣わされたサムードの民のことである。預言者サーリフとサムードの民については、72番目の伝承に語られている。

彼の妻はイエスの振舞いを見聞きして、「その中にあなたをはらんだ胎に祝福あれ。あなたが乳を飲んだ胸に[祝福あれ]」と言った。イエスは「神が彼の書を教え、高慢な者となって死ぬことがない者に祝福あれ」と言った。

(52) イエスと使徒たちの問答 [MJ60]

イエスは「私は現世の表に身を伏し、その背に座した。私には死すべき息子はなく、壊れてしまう家もない」と言った。

彼らが「あなたは、ご自身のための家を持たないのですか」と尋ねると、彼は「激流の通り道に私のための家を建てよ」と言った。彼らはしかし、それでは家は定まらないと言う。

また、彼らが「あなたは、ご自分のための妻を娶らないのですか」と尋ねると、彼は「死すべき妻によって、私は何を為すだろうか」と言った。

(53) [MJ61] イエスの言葉

一番の過ちは現世への愛である。女性は悪魔の罠である。ハムル (khamr) ⁶ はあらゆる悪 ⁷ の鍵である。

(54) [MJ62] イエスと使徒たちの問答

イエスは「現世への愛はあらゆる過ちの源である。財産は現世において大いなる災いである」と語っていた。彼らが「その災いとは何ですか」と尋ねると、彼は「答えて」「その持ち主が誇りや驕りから [逃れられず] 安全ではない、ということだ」と言った。彼らが「もし [それらから逃れて] 安全であれば?」と尋ねると、彼は「答えて」「財産を取り戻すことは、神を想起すること (dhikr) から彼をすっかり遠ざけてしまう」と言った。

(55) イエスの言葉 [MJ63]

私は真理にかけてあなたがたに言おう。天の両側には金持ちはいない。らくだが針穴を通ることは、金持ちが天の楽園に入ることよりも容易である ⁸。

6 葡萄を原料とするアルコール飲料のこと。クルアーンにおける飲酒の禁止とは、端的にはこの「ハムル」の禁止である。クルアーン (2.219), (5.90)などを参照。

7 [Ibn Hanbal 1984] の脚注に示されたバリエーションと [Ibn Hanbal 1999] のテキストを採用し、「もの (shay')」に代えて「悪 (sharr)」と読む (ハリデーイー訳も「悪」である)。

8 例えばクルアーンに次のようにある。神の徴を信じず、高慢であった者たちに、天の門は決して開かれず、「らくだが針穴を通るまで、彼らは楽園に入れないだろう。」(7.40)

(56) イエスの言葉

諸王があなたがたに知恵 (al-ḥikmah) を残したように、彼らに現世を残しなさい。

(57) イエスの奇跡

食卓が降りてきて、その上には大麦のパンと魚が載っていた⁹。

(58) イエスの言葉 [MJ64]

真珠を豚に投げてはならない。というのも、豚は真珠によって何もなさないからである。望まない者に知恵を与えてはならない。知恵は真珠よりもよい。それを望まない者は、豚よりも悪い。

(59) イエスの言葉

大地の塩よ、腐るな。何か腐るとき、それを直せるのは塩だけなのだから。塩が腐るとき、何もそれを直せない。

(60) イエスの言葉

私は真理にかけてあなたがたに言おう。あなたがたの誰ひとりも波の上に館を建てることができないように、あなたがたにとって現世は、それをしっかり定めて捉えることができない。

(61) イエスの言葉 [cf. MJ65]

あなたがたが神にとって誠実な友でありたい、彼の創造のうちアダムの子孫たち [人間] の光でありたいと望むならば、あなたたちに害をなす者を赦しなさい。あなたがたを見舞わない者を見舞いなさい。あなたがたに善くしない者に善くしなさい。あなたがたに返済しない者に貸しなさい。

(62) イエスの逸話 [MJ66]

イエスがアフィーク¹⁰の山道を通りかかった。使徒の男が1人、彼とともにいた。ある男が道をふさいで彼らの通行を妨げた。男は、イエスら2人を叩くまで行かせないと言い、譲らなかった。イエスは「私の頬を叩きなさい」と言い、男は叩いた。そして彼に道を開けた。使徒が拒否すると、イエスは使徒のためにもう一方の頬を差し出した。男はそれを叩いたの

9 クルアーン第5章112節以下では、イエスに向かって使徒たちが、彼らのために食べ物と並べた食卓を神が天から下すようにと求め、神がそれに応じたという奇跡が語られている。この奇跡譚にちなみ、クルアーン第5章は「食卓」章と呼ばれる。

10 アフィークはヨルダンへ下る山道。幾つかの伝承では、終末にイエスが偽キリストを殺す場所とされる [Khalidi 2001: 89]。

で、2人に道を開けた。イエスは「おお神よ、あなたがこれに満足されたならば、私にあなたの満足が届きます。もしあなたがご不満であるならば、あなたは怒りに相応しいのです」と言った。

(63) イエスの言葉 [cf. MJ67]

大麦のパンを取りなさい。安心して、平安に、現世から出て行きなさい。私は真理にかけてあなたがたに言おう。あなたがたの中で行かないの悪しき者は、現世を愛し、その行為に基づき現世を好む知者である。彼はもしできるならば、全ての人に同じように振舞わせるであろう。私は真理にかけてあなたがたに言おう。現世の甘さは、来世の苦さである。現世における苦さは、来世における甘さである。神の下僕は贅沢に暮らすのではない。

(64) イエスの言葉 [MJ68]

私はあなたがたが学ぶように伝える。私はあなたがたがうぬぼれるように伝えはしない。

(65) イエスが神へ語り掛けた言葉 [MJ69]

私がしたいようにではなく、あなたがなさりたいように。私が望むようにではなく、あなたが望まれるように。

(66) イエスにとって好ましい言葉 [MJ70]

「この貧しき者」と言われることが、イエスには最も好ましかった。

(67) イエスの言葉 [MJ71]

使徒たちは「神のメシアよ、神の家 (bayt Allāh) ¹¹ をご覧なさい。何と美しいことか!」と言った。

イエスは「アーメン、アーメン。私は真理にかけてあなたがたに言おう。神はこの礼拝所 (masjid) から1つの石も他の石の上に残さないだろう。彼の民の罪によってそれを破壊するのであれば、神は金によっても、銀によっても、この石によっても、何もお創りにならない。それらよりも神を愛することは、敬虔な心である。それによって神は大地を繁栄させ、[心が] そのようであれば、神は大地を破壊し給う」と言った。

11 イスラームにおいて「神の家」と言えば、メッカのカアバ神殿のこと。ハリデーイによれば、マタイによる福音書 (24.1) の「神の神殿」が、同伝承ではカアバ神殿、イスラームの礼拝所 (日本ではモスクと呼ばれる。マスジドとは「平伏礼 (sajida) する場所」の意) に代えられている。イエスに関連する諸伝承には、このように聖書の物語を踏まえつつ、イスラーム的な記述を加える変容が見受けられる。

(68) イエスの言葉 [MJ72]

悪魔は現世とともにある。彼の欺きは財産とともにある。彼の誤魔化しは願望とともにある。彼の完成は欲望のもとにある。

(69) イエスの言葉 [MJ73]

使徒たちよ、あなたがた自身を破壊することによって現世を求めてはならない。現世にあるものを放棄することによって、あなたがた自身を求めなさい。裸であなたがたは来て、裸であなたがたは行く。明日の糧を求めてはならない。今日分で充分である。明日は明日のことだけを伴って始まるのだ¹²。

(70) イエスが神に語り掛けた言葉 [次の伝承の一部]

おお神よ、私は私自身の行為に取り掛かります。私よりも貧しい貧者はありません。

(71) イエスが神に語り掛けた言葉 [MJ74]

おお神よ、私は今や私が嫌うものを拒絶することができません。私が好むものの利益を手にすることもありません。今や、事柄は私以外の手にあるのです。私は私自身の行為に取り掛かります。私よりも貧しい貧者はありません。私の敵が私に対してほくそ笑むことなく、私の友が私に辛く当たることはありませんように。私の宗教に私の災いをもたらさないで下さい。私に慈悲をかけない者に対して力を与えないで下さい。

72 番目以降は、イエスの言行を伝える伝承ではなく、「イスラエルもの (Islā'īlīyāt)」¹³ と呼ばれる、ユダヤ教に由来する内容の伝承が殆どである。それらの約半数はワフブ・イブン・ムナツビフ (Wahb ibn Munabbih 730 年頃没)¹⁴ というイエメン人伝承家が伝えている。彼はまた、79 番目の伝承には伝達者としてではなく、登場人物の 1 人として現われる。

12 ハリーデーによれば、ヨブ記の「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。」(1.21) やマタイによる福音書「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である」(6.34) を踏まえた言葉。

13 「イスラエルもの」という語は、クルアーン注釈家、神秘家、歴史家などの間で多様な意味で用いられるが、ここではユダヤ教起源の説話としての「イスラエルもの」のこと [Vajda 1978]。

14 ワフブは特にイスラエルものの伝承に詳しくたことで知られる [Khoury 2002]。

(72) サーリフとその民の逸話¹⁵

人々を傷つけたことで非難されていた男が、薪を拾いに行ったある日、持っていたパンを他人に分け与えた。男は薪を集めて無事に帰ってきた。サーリフが彼を呼び、「今日、あなたは何をしたか」と言った。彼は〔答えて〕「私は2切れのパンを携えて外に出て、1つを分け与え、もう1つを食べた」と言った。サーリフに薪を解くように言われて解いてみると、薪の束の中に木の幹のように黒いもの〔蛇〕があって、薪の中の切り株に噛みついていて、彼は喜捨 (ṣadaqah)¹⁶ によってそれ〔蛇に噛まれること〕を免れたのである¹⁷。

(73) イスラエルの民に下された神の啓示

アダムの子孫〔人間〕はみな、過ちを犯す。過ちを犯す者の中で善良な者とは、悔悟する者たちである。

(74) イスラエルの学者の逸話

イスラエルの民の若者に、書を読み、学ぶ者がいた。彼はその学識と朗誦 (qirā'ah)¹⁸ によって栄誉と財産を求め、逸脱 (bid'ah)¹⁹ した。現世の中に栄誉と財産を得て、数年の間そのように留まった。ある夜、彼は自分自身について考え、「それら〔栄誉や財産〕を、私が作り出したもの〔逸脱〕

15 サーリフはサムードの民に遣わされた預言者。クルアーンに名を挙げられた預言者であるが、ユダヤ教、キリスト教の聖書に由来する人物ではなく、アラブの預言者である〔大塚他編 2002: 420-421〕。

16 イスラームの実践としての喜捨を指す語には、「サダカ」と「ザカート (zakāt)」の2つがある。前者は自発的喜捨を、後者はムスリムに課せられた基本的義務（五行と呼ばれる5つの行為）の1つとしての喜捨を意味する。但しクルアーンにおいては、これら2つの語は明確に区別されていない〔大塚他 2002: 395-396, 398-399〕。

17 M. アシン・パラシオスがガザリーの『再興』から集めたイエス関連の伝承の中には、イエスがサーリフに代わり、これとほぼ同一内容の伝承が存在する。〔Robson 1995: 126-127〕参照。

18 イスラームの伝統においては、クルアーン朗誦のことを「キラーア」と呼ぶ。イスラームの聖典クルアーンの名称は、この語と同語根であり、「(声に出して) 読まれるもの」の意。

19 イスラームの伝統においては、ムハンマドが伝えた正しいイスラームから逸脱する考え方や行為、ものなどを指して「ビドア」と呼ぶ。ムハンマドの時代には存在しなかったものごとに関して、後代の悪しき付け足しであるとし、異端とみなされる場合もあるが、必要な改革として法学的に容認される場合もある〔大塚他編 2002: 812〕。スーフイズムはまさにその初期に「ビドア」であると非難された。

を知らない人々に与えよ。神は私が作り出したものをご存知ではないのか[否、ご存知のはずである]。定め時は既に迫っている」と言った。彼は努めて悔悟し、鎖骨を打ち砕いてそこに鎖をつけ、礼拝所の円柱の1本に結びつけた。そして「私の悔悟のうちに神が啓示を下されるか、私が現世の死を死すまで、この場所から離れまい」と言った。

神は彼について、イスラエルの預言者の1人に次のように啓示した。「もしお前が、私とお前の中で罪を犯していたならば、お前に起きたことに関して、自身を悔悟せよ。しかしながら、私の下僕のうちお前が誤った道を進ませ、そして死した者たちは、私が彼らを地獄へ入れ、私はお前を赦さないだろう。」

(75) イスラエルのある女性の逸話

イスラエルの民の女性が、水辺を通り過ぎた。彼女は[その水辺で]浄めをし、それから立って礼拝した。彼女は60年、あるいは70年、食べたり飲んだりもせず、[どこにも]行かずに留まった。やがて心は清くなり、そして[そこから]去った。

(76) イスラエルのある知者の逸話

イスラエルの民の知者が、知識において彼に優る知者のもとへ来た。彼は[自身より優る知者に尋ねて]「私は何を食べるだろうか」と言った。彼は[答えて]「それによってあなたの空腹を鎮めるもの」と言った。

彼は[同様に知者に尋ねて]「私は何を着るだろうか」と言った。彼は[答えて]「それによって、あなたの恥ずかしさを隠すもの」、あるいは「メシアの衣服」と言った。

彼は[同様に知者に尋ねて]「私は何を建てるだろうか」と言った。彼は[答えて]「太陽からあなたを隠し、風からあなたを覆うもの」と言った。

彼は[同様に知者に尋ねて]「私はどれくらい笑うだろうか」と言った。彼は[答えて]「あなたの顔が輝くまで」と言った。

彼は[同様に知者に尋ねて]「私はどれくらい泣くだろうか」と言った。彼は[答えて]「神を畏れて泣くことに疲れることはない」と言った。

彼は[同様に知者に尋ねて]「私の行為のうち私は何を明らかにするだろうか」と言った。彼は[答えて]「欲深さが従うものと、人々の言葉があなたを承認しないもの」と言った。

彼は[同様に知者に尋ねて]「私の行為のうち私は何を隠すだろうか」

と言った。彼は[答えて]「あなたが善く振舞っていないと思うもの」と言った。

(77) イスラエルのある男の逸話

イスラエルの民のある下僕は、髪が白くなるまで[神に]奉仕し、旅をした。この下僕以外には相続人のいないある人物が死ぬと、人々は彼にその死を知らせ、財産を託すことを好ましく思わなかった。[だが、彼はこうした事情を人々から聞くに至り]その人物がいつ亡くなったか、自分が人々とどれ程の期間離れていたかを尋ね、「これこれだ」と聞くと、その財産を遠ざけ、放棄した。

(78) 神からイスラエルの民に語られた言葉

お前たちの言葉で私に呼び掛けよ。お前たちの心は私から遠い。お前たちが恐れるものは無益だ。

(79) スライマーン・イブン・アブドゥルマリク (Sulaymān ibn 'Abd al-Malik)²⁰ の逸話

スライマーン・イブン・アブドゥルマリクがダマスカスの礼拝所に入った。そして聖域に絵があるのを見て、彼は「これは何か」と言った。周囲の者たちも知らなかった。彼は次のように進言された。「信仰者たちの長よ、ワフブ・イブン・ムナッビフに送りなさい。彼はあらゆる書を読んでいるのですから。」そこで彼に送ると、彼は[その中に記された]書に気づき、それを読んだ。そこには次のようであった。

アダムの息子[人間]が、もしあなたの寿命の残りを知ったならば、あなたの望むところの期間だけ、禁欲したであろう。しかしあなたは後悔を覚え、あなたの歩みは止まり、恋人はあなたを捨て、隣人もあなたを放置した。あなたはあなたの民のもとへは戻れず、あなたの行為に加わるものはない。悲しみ、後悔する前に、復活の日のために行為なさい。

(80) イスラエルのある若者の逸話

イスラエルの民が礼拝所に入った。彼らには祝日('id)があった。年若い少年が礼拝所の門の外ところに立った。彼は泣き出し、泣き声を上げて「彼は私のように、お前たちと一緒にはいらない。私は何某の仲間だ、何某の仲間だ」と言っていた。

20 ウマイヤ朝第7代カリフ。在位715-717年。

彼らの預言者たちの言葉で、次のように書かれていた。「誠実な者たちのうちの何某が、かの少年のためにいた。」

(81) ある聖典の中に記録された神の言葉

貧者の財産を使う者は、その最期には貧困にされる。弱者の力で建てられた館は、その最期には廃墟にされる。

(82) イスラエルの修道者の逸話

イスラエルの民のある下僕が、修道院で〔神に〕奉仕していた。人々が彼のもとに売春婦を遣わし、彼女は雨の夜の暗闇の中を到着した。彼女が雨宿りを乞うと、彼は彼女を中へ入れ、ベッドで眠らせ、自身は立って礼拝をしていた。彼女は彼に近づき、彼女の性格が善良であるのを見せると、彼の心が彼を彼女に向かわせた。彼は「否、神かけて、火に対するお前の辛抱のほどを見るまでは」と言い、ランプに近づき、彼の指が燃えてしまうまでその火の中に入れた。それから彼は礼拝の場所に戻り、彼女がまた彼を呼ぶと、彼はランプに近づき、また彼の指が燃えるまでそのの中に入れた。〔このやりとりを再度繰り返した。〕彼女は彼を見て、気絶し、そして死んだ。朝になると、彼らは彼女が為したのを見に行った。彼女は死んでいた。彼らは「神の敵よ、男よ、お前は彼女と関係を持ち、それから彼女を殺したのだ」と言った。彼らは彼を連れて彼らの王のもとへ行き、彼について証言した。〔王は〕彼を殺すよう命じた。彼は礼拝をすると、〔神に〕呼び掛け、次のように言った。「私が犯していないことであなたが私を責めたりなさらないことを、私はよく存じ上げております。」

神が彼女にその魂を戻すと、彼女は「彼の手を見て下さい」と言い〔彼の潔白を証言して〕、それからまた死んだ。

(83) 82の異伝

「私が彼の手を見るとそれはもう燃えていて、私はその場で気絶した」と彼女が語ったとは言わずに〔その部分を省略して〕伝えた。

(84) ある旅人の逸話

ある旅人が供の者といるとき、獲物を狙うライオンと遭遇した。彼らが〔無事に〕通り抜けると、供の者が彼の年長者〔旅人〕に「私はライオンに注意するようあなたに伝えなかったか」と言った。旅人は〔それに答えて〕「私が神以外のものを恐れると思うのか」と言った。「神以外のものを私が恐れると神に教えるような者は、私には好ましくない。」

(85) ある旅人の逸話

旅人と供の者がおり、3日ごとに一度、食物が彼らのもとに届いた。彼らの一方のせいで、彼ら2人に食物が届かなかったとき、年長者〔旅人〕が供の者に「私たちのうち一方が行なったことで、食物が禁じられたのだ。お前が何をしたのか、思い出さない」と言った。

供の者は何もしていないと言ったが、その後思い出し、「貧しい者が門のところを訪ねて来ましたが、その前で扉を乱暴に閉めました」と言った。彼が神に赦しを求めると、彼らのもとのにそれまで届いていたように、食物が届くようになった。

(86) ある旅人と死者の逸話

旅人がある村に入った。その村の権力者は既に他界しており、彼はその〔村〕から出た。彼は「私はこの圧政者を埋葬しない」と言い、眠りについた。それから〔目覚めて〕彼のところに来て、言った。「何某よ！ 神の慈悲からあなたは何ものかを得たか？」彼は「いいや〔得なかった〕」と三度言った。そして彼は言った。「彼のこの痛みの中に生じたものが何であるか、あなたに分かるか。」

(87) ある旅人と死者の逸話

旅人とその供の者がいた。旅人が供の者に次のように言った。「村に入り、私のために死者を包む布を買ってきておくれ。というのも、私には速やかに時——すなわち死——があるから。」

供の者が村に入ると、その村の権力者は既に他界し、人々が彼の埋葬に集まった。供の者は人々が帰るまで買い物ができなかった。布と香油を買い、旅人のところへ戻った。彼は既に死んでおり、ライオンが彼の顔を食べてしまっていた。供の者は嘆き悲しみ、次のように言った。

「かの圧政者について言えば、死装束を着せ、防腐処理を施し、埋葬される。何某〔この旅人〕について言えば、彼の顔は食べられた。かの圧政者について言えば、ただ1つの善しがなく、神は彼を現世から逝かせることを好まれた。彼には来世において、何の取り分もない。かの旅人について言えば、彼は代理人として働いて（すなわち取るに足らない、些細な仕事をして）いたものであった。そして神は、彼があゝの苦痛に気づくことなしに、彼を現世から逝かせた。」

(88) ある旅人の逸話

ある旅人が王と共に旅した。王は旅人がするようにすることを[自らに]命じた。2人が涸れ谷に入ると、死体があった。旅人は死体の臭いに服で鼻を覆った。王も旅人と同じようにした。旅人は王に向かって、このようにした[鼻を覆った]のはなぜかと尋ねると、王は「お前がするのと同じようにすると自らに命令したからだ」と言った。旅人が自分と同じ[死体の]匂いに気づいたためかと尋ねると、王は「不信仰者の臭いだけは、私たちにとって有害であるから」と言った。

(89) ある男に下された神罰

ある男が聖なる館²¹の香炉の上にあった。彼には2人の息子がいた。2人が女性をからかい始めたが、男は息子たちを非難しなかった。神は次のように言い給うた。「私の力にかけて誓おう。私は彼ら3人を1日で死なせよう。彼以降の彼の家を[罰として]貧しくしよう。」

(90) ある旅人とイブリースの逸話

イブリースが旅人の許へ来た。イブリースは彼を欲したが、彼には何もできなかった。イブリースは「私はお前と親しくになりたいのだ」と言った。旅人は彼に向って、「私にはお前と親しくする必要などない」と言った。イブリースは「否！ お前は、お前が望むものについて私に頼んだであろう」と言った。彼は「そうだ」と答え、「何によってお前は人間を誘惑するのか」と言った。

イブリースは[答えて]「我々[悪魔たち]は気短で軽率な人間²²を見ては、子供がボールで遊ぶように、彼らを弄ぶのだ」と言った。

(91) その他のイスラエルの民の伝承 [上記90の異伝]

私[イブリース]は引っ掻き跡の中に房のようなものを作り、切った跡の中に穂のようなものを作る²³。私がどれほど[神を]畏れるだろうか。

(92) イスラエルのある朗誦者

イスラエルの民の中に、罪深い朗誦者がいると明らかとなった。お前たちの中に、さらに[そのような罪深い者が]増すだろう。

(93) イスラエルの預言者に下された神の啓示

21 アラビア語で「聖なる館」(bayt al-muqaddas)と呼ばれる建築物は、メッカのカアバ神殿とエルサレムの岩のドームである。

22 クルアーンに「人間は気短に創られている」(21.37)とある。

23 どのような意味の比喩であるかは不明。

お前の民に言え。私の敵の食べ物を食べるな。私の敵の飲み物を飲むな。私の敵の感謝 [と同じ] 感謝をするな。彼らが私の敵であるように、[彼らと同じことをする人々は] 私の敵であるだろう。

(94) イスラエルの民に下された啓示

男と女が彼の住まいを尋ねると、彼は彼らに警告し、神の日々を思い起こさせた。彼の息子の幾人かは女に触れたある日のことを思った。彼は「我が息子よ、ゆっくり。我が息子よ、ゆっくり」と言った。彼はベッドから落ちて脊椎を折り、彼の妻も落下させ、彼の息子は軍隊で殺された。神は彼らの預言者に次のように啓示した。

私は何某に次のような伝承を伝えよう。私はお前の背骨から決して正しき友を出さない。お前が「我が息子よ、ゆっくり。我が息子よ、ゆっくり」と言うことなしに、私のためにお前が怒ることはないからだ。

(95) トーラーに記された言葉

罪を犯す隣人がいて、それを禁じないような者は、その [隣人である罪人の] 仲間である。

(96) イスラエルの民の逸話

イスラエルの民のある集団が昼間に断食し、夜に食べ物を置いて、彼らの間で分けた。彼らの中から1人の男が立ち上がり「沢山食べるな、沢山飲むな、沢山眠るな」と言った。

(97) エレミヤが神へ語り掛けた言葉

「主よ、あなたの下僕ダビデをお選びなさい。彼はあなたのための礼拝所 (masjid) を建てました。彼は仲間たちの中で、花婿のようにそれを担ったものでした。」

彼は次のように言われた。「お前には分からないのか。もしお前に次のように言われたとしたら？ ……空に幾つの門があるか、お前は知っているか。あるいは、神には幾つの宝庫があるか。あるいは、海には幾つの源があるか。あるいは、海が山についてお前に訴えに来て、海がお前に「私の波は増え、私の源は増える。私はかつて、大地に寄りかかりたいと願った」と言う [としたら?]. 大地がお前に「木々が増え、私の山が増え、私の動物たちが増え、私の川が増える。私はかつて、海に寄りかかりたいと願った」と言う [としたら?]. では、お前はいずれに味方して裁くだ

ろうか。」²⁴

(98) 知恵 (al-hikmah) の中の言葉²⁵

心の中に警告する者がいる者は、彼には神からのご加護がある。心の中で人を正しく処遇する者は、神がそれによって力を増して下さる。神への服従における謙虚さは、不服従による頑なさよりも確かである。

(99) 知恵の中の言葉

アダムの息子〔人間〕よ、お前は私を求め、2つの燃え盛る炎の間に私を見つけるであろう。お前はお前の知る善を為し、お前の知る悪を放置する。

(100) 知恵の中の言葉

その言葉が終わるまで、問いかける者に耳を傾け、それから慈悲をもって応答せよ。孤児に対しては慈悲深い父のようであれ。不正な者に対して勝利者であれ²⁶。お前たちは恐らく地上における神の代理人となろう。

(101) 知恵の中の言葉

私たちは不忠実ではない。彼の不忠実は、彼にとって十分である。

(102) 神の言葉

その欲求を放棄する若者よ、〔彼は〕私のもの。その若さを使い果たす者、〔それは〕私のため。お前は私のもとで私の天使のようである。

(103) トーラーに記された言葉

アダムの息子〔人間〕よ。お前はお前の言葉で私を唱念する (tadhkuru-nī) が、お前は私を忘れる。お前は私に呼び掛けるが、お前は私から逃げる。私はお前に糧を与えるが、お前は私以外のものに仕える。

24 イスラームの伝承では、ダビデは英知と厳正な裁きの能力を与えられた人物として描かれている。〔プハーリー 2001 (3) : 337-338〕など。

25 同伝承から 101 までは、「知恵の中に書いてある」や「知恵に語られる」として短い言葉が引用される。知恵文学に関連するものであろうかと推測される。しかし管見の及ぶ限り、旧約聖書のヨブ記や箴言、詩篇、旧約聖書続編の知恵の書には、100 番目を除いては類似する言葉は見当たらなかった。

26 旧約聖書続編のシラ書に極めて類似した表現がある。「貧しい人の訴えに耳を傾け、穏やかにそして柔和に、答えるがよい。不当に扱われている者を加害者の手から救い出せ。勇気をもって決断せよ。孤児たちに対しては父親のようになり……」(4. 8-10)

3. 考察

前節で訳出したイエスの諸伝承の主な内容は、イエスの奇跡譚、現世放棄と来世重視、現世的富の否定と清貧、知恵の重視と学識（‘ilm）への軽蔑、福音書に由来する物語であった。これらは、Ⅱで確認した禁欲主義的人物としてのイエスに関連する諸言説の内容に一致するところである。特に、現世への否定的言説が繰り返され、強調されていることが分かる。前巻で訳出した前半 50 の伝承の中には、神への愛や隣人愛などの「愛」について述べたものも複数あったが、今回訳出した後半には、明示的に神への愛を述べた伝承は 1 つだけ（67）である。そして、最後の 30 ほどの伝承は、直接イエスに関連するのではなく、「イスラエルの民」にまつわる多様な内容であった。なぜこれらの「イスラエルもの」が、例えばその名も言及されたダビデなど、旧約聖書に登場する人物の章にはなく、イエスの章に入れられたのであろうか。現世的な富や学識の否定、異性への慎みを説く内容が、イエスという人物に相応しいと判断されたのかもしれない。旅人が登場する複数の伝承も、死への言及や悪魔の誘惑などの内容がイエスの諸伝承に合致すると捉えられたのかもしれないし、あるいは、先に引かれたイエスの旅路（62）に重ね合わせてここに列挙したのかもしれない。

実際、「ダビデの禁欲」（第 9 章）を見てみると、そこに収められた諸伝承の主題は、「イエスの禁欲と説教」に含められた「イスラエルもの」の主題とは、重点の置き方が幾分異なるように思われる（勿論、それらは全て同じ「ズフド」であるのだから、一定の共通性があることは当然であるが）。ダビデの禁欲としては、神の唱念、想起（dhikr）に勤しむことが最も多く、その他に不正への戒め、神への感謝や恐れといった事柄が挙げられている。「愛」に関しては、神を愛し、神を愛する者を愛すべきことを述べる伝承が 1 つだけあった。そしてそれらは神との直接的な対話や神からの啓示、詩篇の言葉として示される [Ibn Hanbal 1984:150-158]。

第 12 章全体としては、まずイエスら預言者と敬虔な人々の道に従うべきことを端的に伝えた（1）後に、神を愛すべきことや神を想起すべきこと、信仰者として望ましい態度や実践（謙虚さや来世を優先すべきこと、隣人愛、清貧など）を示し、それらの間にイエスの奇跡譚など福音書に由来する物語を挿入する。さらに現世放棄、現世的富や学識の否定などといった後半の内容を重ねていることが分かる。そして、神への愛をはじめとして、

定説として言われるような「暗く、悲観的雰囲気 に満ちた禁欲主義」と異なる要素が認められる点は、やはり注目すべきであろう。

Ⅳ. 終わりに：今後の課題

イスラームの禁欲主義研究には未だ多くの課題が残るが、ここでは1つだけ触れて結びとしたい。「禁欲」に関しては、キリスト教からの影響は勿論、特にスーフイズムとの関連から注目されてきた。筆者自身もスーフイズム研究から始め、スーフィーに影響を与え、異なりつつも重なり合う要素を持つものとして、禁欲主義に関心を持つようになった。しかし、禁欲的価値を説く言説はスーフイズム以外の様々なジャンルの中にも見出される²⁷。スンナ派の六大ハディース集の中にも禁欲 (zuhd) に関する章を設けるものがある²⁸。それらの諸伝承の内容は多岐にわたり、神を愛することや他者を愛することへ言及するものも散見される²⁹。これら正統ハディース集の「禁欲」とイブン・ハンバルら禁欲家が示す「禁欲」との共通点や相違点を明らかにしておくべきであろう。確かに、いわゆる禁欲主義とスーフイズムは、明確な特徴や方向性を持つ独特の運動である。しかしながらそれ以前に、そうした運動に取り組んだ人々は「ムスリム」であり、(時に「正統」的立場からは、逸脱的であると非難されたことがあったといえ) 正しい「イスラーム」を求めて活動したはずなのであるから。これらの運動の「特異性」を際立たせるだけではなく、イスラーム文化における「普遍性」にも目を配りながら研究を進めることが必要であると考える。

参考文献

Barker & Gregg 2010 *Jesus beyond Christianity: the Classic Texts*, Oxford University Press.

27 預言者ムハンマドの伝記は勿論、[Khalidi 2001] を見ても、歴史学や倫理学など多様なジャンルに禁欲に関する伝承が引用されていることが分かるだろう。

28 ブハーリー (810-870) とムスリム (817/21-875) の『真正集』、アブー・ダーウード (817-889)、イブン・マージャ (824-887)、ティルミズイー (825-892)、ナサーイー (830-915) ら4名の『スナン』を総じて「六書」と呼ぶ。注2で触れた狭義のハディースについて、特に精選され信用に値するものが収録されている。六書のうち、ムスリム、イブン・マージャ、ティルミズイーが「禁欲 (zuhd)」に関する章を設けている。

29 例えば、[Tirmidhī 2011 (3) :325-326]。

- Cragg 1985 *Jesus and the Muslim: an Exploration*, George Allen & Unwin.
- Ibn Ḥanbal 1984 *Kitāb al-Zuhd*, ed. by Muḥammad Jalāl Sharaf, 2 vols. in 1, Dār al-Fikr al-Jāmi‘ī.
- 1999 *Kitāb al-Zuhd*, waḍa‘a ḥawāshiya-hu Muḥammad ‘Abd al-Salām Shāhīn, Dār al-Kutub al-‘Ilmīyah.
- Khalidī, Tarif 2001 *The Muslim Jesus: Sayings and Stories in Islamic Literature*, Harvard University Press.
- Khoury 2002 “Wahb b. Munabbih,” *Encyclopaedia of Islam*, New ed., 12 vols, Vol.11, 34-36.
- Robson 1995 *Christ in Islām*, Llanerch (Reprint, Originally published in 1929, J. Murray).
- Tirmidhī 2011 *Jāmi‘ al-Ṣaḥīḥ wa-huwa Sunan al-Tirmidhī*, 5 vols., Dār al-Kutub al-‘Ilmīyah.
- Vajda 1978 “Islā‘īlīyāt,” *Encyclopaedia of Islam*, New ed., 12 vols., Vol. 4, 211-212.
- 大塚 和夫他編 2002 『岩波イスラーム辞典』, 岩波書店.
- 加藤 瑞絵 2020 「ムスリムの模範としてのイエス：イブン・ハンバル『禁欲の書』の諸伝承をもとに」, 『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』第28巻, 77-93頁.
- ブハーリー 2001 『ハディース：イスラーム伝承集成』 牧野信也訳, 全6巻, 中公文庫.
- マハッリー&スューティー 2002-6 『タフスィール・アル=ジャラーライン (ジャラーラインのクルアーン注釈)』 中田香織訳, 中田考監訳, 全3巻, 日本サウディアラビア協会.
- ムスリム 1987-89 『日訳サヒーフムスリム』 磯崎定基他訳, 全3巻, 日本サウディアラビア協会.

